

はだしのゲン

中沢啓治・原作

九歳の少年ゲンがみた広島
戦争と原爆の真実を演じる感動の舞台

「はだしのゲン」は中沢啓治氏が自らの被爆体験をもとに太平洋戦争末期から戦後の苦難の時代を力強く生きぬくゲンの姿を通じて反戦反核を訴えたヒット作品

神田香織が語り尽くす立体講談

「まったく、戦争や大災害の前では人ははかない存在かも知れませんが、決してあきらめるのではなくゲンのように『来るなら来い!』という気持ちで前向きに生きてゆきたいと私は願っております。」



主人公中岡ゲンは小学校二年のわんぱくざかりです。下駄の塗装を生業にしながら戦争に反対しつづける父と心やさしい身重の母と姉と弟に囲まれ貧しいながらもいたわりあって暮らしていました。

しかし8月6日、広島に原爆が投下され一家の生活は文字どおりメチャクチャに破壊されてしまうのです。偶然にもゲンは寄り掛かっていた塀が熱線を防いだため、そして母、君江は二階の物干し台におり長いひさしが熱線を防いだ為奇跡的に助かりました。しかし、階下にいた父、大吉と姉、英子と弟、進次は家の下敷きになってしまったのです。君江とゲンは必死になつて家族を助けだそうとするのですが二人の力ではどうにもなりません。やがて炎がゲンの家にも迫ってまいります。「このままではゲンと君江にも燃え移ってしまう」父大吉は挟まれた材木の隙間から必死になって二人に「逃げる!」と叫ぶのです。断腸の思いでその場をたち去るゲンと君江、やっと逃げ出したものの君江はショックの為に産気づきやがて女の子を産み落とし、ゲンがその子を取り上げます。

生まれたばかりの赤ん坊を抱きしめ、そして高々と空に向かってゲンは「二度と、こんなことはさせん。わしの力で戦争なんか無い、ええ世の中を作っちゃる。わしがおまえを守ってやる、守っちゃるでえー」と炎と煙がたちこめる空に向かって力強く誓うのでございました。

(上演時間 1:30)

神田香織さんの高座着姿は凜として美しく、加えて芯の強さを感じさせます。語り芸は女性には不向きといわれますが、それをはね除けてのご活躍、友人としてうれしく思っています。

マルセ太郎